社会保障ミステリー

IT化で開業医が減る？

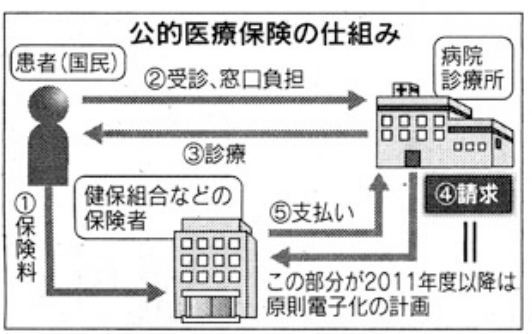
高齢医の引退早める

医療の現場がきしんでいる。特に病院の勤務医が大変だ。救急や産科、小児科など患者は押し寄せるのに、医師が足りない。疲れ切り、勤務をやめ、開業医に転じることも多いという。政府の医師不足対策も勤務医を念頭に置く。ところが開業医も大きく減りかねないとの見方がある。

その大きな原因とされるのがIT（情報技術）化。開業医（診療所）は医療費を請求する時、いまだに紙の請求書を使うことが多い。政府は医療費の請求・審査事務を効率化するため、二〇一一年度から請求書を原則、電子化し、オンラインで流すことを義務化する方針。これに対し、高齢の開業医を中心に「これを機会にやめる」という声があがっている。

全国保険医団体連合会が全国約一万千人の開業医（歯科を除く）に聞いたところ、一二・二%が「やめる」と答えた。やめる理由は「操作に対応できない」「導入に見合う収入がない」が目立った。東京保険医協会の同様の調査では、七十歳以上の開業医の半数近くが「やめる」と回答した。

「もう十分働いた」という高齢の医師が勇退していくのは自然なことだが、まだ働く意欲や能力があるにもかかわらず「やむを得ずやめる」となるとどうだろう。医療関係者の間では「経験豊富な医師は患者をよく診て、薬を多用することもなく、効率的に治療する」ともいわれる。



今後、開業医の役割は増す。「かかりつけ医」「主治医」として、患者の常日ごろの健康状態や家庭の状況まで把握した能力の高い開業医がいれば、患者がすぐに大病院に行くことも減り、病院の負担は軽くなる。医療費も効率的に使われるようになるはずだ。そういう医師が意に反してやめていく状況をつくりだすことは上策とはいえない。

IT化以外にも、開業医らを取り巻く環境は厳しくなっている。四月からは再診時に、五分以上診療しないと報酬の一部が支払われない規定が設けられた。費用請求のために書かなければならない書類もどんどん増えている。「手かせ足かせをはめられてやる気を失う」という医師の声が珍しくない。

患者にとってよい医師が評価され、能力や気力があれば医療を続けられる環境をつくっていくにはどうしたらいいのか。考えどころだ。

（編集委員　山口聡）